

「学術用語集・図書館学編」における分類学用語の考察

Classification Terms in *Japanese Scientific  
Terms—Library Science*

小 林 胖

*Yutaka Kobayashi*

*Résumé*

Ministry of Education's *Gakuzyutu Yôgosyû* (*Japanese Scientific Terms*) was prompted by the postwar reform of national orthography. Its Library Science section was published in 1958 after 12-year efforts of the Subcommittee on Library Terms, Council for the Encouragement of Science, Ministry of Education.

As candidate vocabulary the *A. L. A. Glossary* (1943) was first selected and in addition to this the Unesco *Vocabularium* (1953) was adopted afterwards. The published vocabulary is composed of Japanese-English and English-Japanese parts, Japanese terms being printed both in Romanized and orthographic forms.

Terms pertinent to classification were extracted from these three vocabularies and it was found that terms from the *A. L. A. Glossary* [A] are almost completely contained in the *Yôgosyû* [M]. Then [M] was compared with Unesco terms [U], which seem to contribute to [M] by about 70% including 20% common to [A].

As to distribution of terms by category, [U] is richer in fundamental and structural terms. For reference B. C. Vickery's *Faceted Classification* (1960) and D. J. Foskett's *Classification for a General Indexing Language* (1970) were consulted. The former gives a number of essential terms relative to structure and notation, and the latter to categories and relations.

- I. 緒 言
- II. 資料の選択
- III. 「学術用語集」成立の事情
- IV. 資料の解説
- V. 分類学用語の採取方法

小林 胖： 慶応義塾大学文学部図書館・情報学科教授。

Yutaka Kobayashi, Professor, School of Library and Information Science, Keio University.

## VI. 語彙の比較方法, 結果

- A. [M], [A], [U] の数量的比較
- B. [M], [A], [U] の一致語の考察
- C. [M]  $\supseteq$  [A] と [U] との比較

## VII. [V] との比較

## VIII. ま と め

### I. 緒 言

ファセット分類法およびその基底となっているファセット分析の考えは、わが国では十分理解されているとはいえず、またその利用も殆んど見られないといってよからう。筆者は大学院においてテキストとして B. C. Vickery の本 [資料 V] を用いたことがある。その経過において、はしなくもこれに用いられている分類学の概念あるいは用語の中には、対応する日本語が見当らないものが少くないことを経験し、さらに進んでわが国では分類学用語が全体として偏り、また絶対量からみても不足しているのではあるまいかとの疑念を抱くに至った。

今回、わが国で一応の規準とされている文部省の「学術用語集・図書館学編」およびこれと関連のある外国の用語集、ならびにテキストに用いた文献等を比較検討する機会をもったので、その結果を報告し、将来の改善の方向も併せて考察する。

### II. 資料の選択

この考察の対象とする資料としては、問題のそもそもの発端をなした Vickery の *Faceted Classification* [資料 V] と、文部省の「学術用語集・図書館学編」[資料 M] を基本とするのが順序である。この学術用語集は後述の如く A. L. A. およびユネスコの図書館用語集 [資料 A および U] を底本としたものであるから、[M] との系譜関係からいってこれらも欠くことができない。

他方、そもそもファセット分析の構想は S. R. Ranganathan に始まるものとされているが、今回はそこまで遡るだけの用意がないので、あえて Ranganathan の著作はオミットした。その代わりに、上記 Vickery を分類法研究グループ (CRG) の特殊分類法研究の開花期を代表するものと考え、その後の10年間における一般分類法への志向、ならびに情報検索論の進展を反映するものとして、D. J. Foskett の *Classification for a General Index Language*, 1970 [資料 F] が手頃である

と考へ、これは参照資料として用いることとした。

### III. 「学術用語集」成立の事情

文部省の一連の「学術用語集」は、その序文によれば遠く明治期の学会の用語制定に遡るものであるが、直接的には1946年11月の「当用漢字表」<sup>1)</sup>と「現代かなづかい」<sup>2)</sup>の制定・告示を契機とするものである。いうまでもなく、これは国記表記法の強度の変革であり、表記法の変革は語彙の変換(言い換え)を必然なものとし、その同じ波がこの学術用語にも及んだものといえることができる。

図書館学用語については、「学術用語集」のうち人文科学系の領域の最初のものとしてとり上げ、1947年から着手されている。これに従事したのは学術奨励審議会学術用語分科審議会図書館用語専門部会(主査:土井重義)という大へん長い名前の委員会である。これが完成し、刊行されたのは1958年であるから、実に12年の長きにわたる努力であったといえよう。ちなみに、A. L. A. の用語集も16年を経過し、またユネスコのものも10数年を経ていることを考え合わせると、このような事業の困難さは十分推量されよう。

さて、学術用語集は、国語表記の改革の一環として、次の共通方針がとられている(まえがきによる):

1. 用語は平易・簡明で理解しやすく、かつ語感のよいものを選ぶこと、
2. 普通に使用される慣用語は、はなはだしく不合理でないかぎり、これを尊重すること、
3. 国語を尊重すること、  
俗語でも適当と考えられるものは、用語中に採録すること、外国語ですでに慣用されているもの、もしくは国際的用語となっているもの、または適当な訳語のないものはむしろこれを尊重すること、
4. 略語・略称であっても、普通の慣用語となっているものは採用することを妨げないが、極端に符

- 号化したものは避けること、
5. 同音異議の用語（特に漢語）は、つとめて避けること、
  6. 意味のない漢字の使用（特にあて字）は、つとめて避けること、
  7. 用語については、大要の方針によること：
    - 1) 漢字は当用漢字表によること、したがって、同漢字表にないものは書き改めるか、または他の語に言いかえること、
    - 2) かなづかいは現代かなづかいによること、
    - 3) 外国語の表記は、かたかな書きを原則とし、大要文部省所定の「外国の地名・人名の書き方」<sup>9)</sup>を準用すること、
    - 4) 用語のローマ字書きは、「ローマ字のつづり方」<sup>10)</sup>の第1表に掲げたつづり方によること、
    - 5) 送りがな、<sup>11)</sup>その他の表記に関しては、大要文部省所定のものによること。

以上の「方針」は、学術用語固有のものというよりも、むしろ国語表記一般に通ずる原則であることはいうまでもない（まえがき、p. 4）。上記7項目を多少区分すれば、第1～4項は主として語の選択、とくに言い換えのための選択にかかわり、第5～6項には、これと表記との関連が打ち出されている。第7項は純粹に表記法のみに関するといえよう。従って、第7項で「用語」とあるのは「表記法」と読みかえるのが妥当と思われる。

本来、学術用語の公定は、命名法 (nomenclature) あるいは分類 (classification) に基づく中核的部分、ならびに学界の consensus に基づき定義を与えた部分を中心とすべきである。個々の用語は随時、ある学者の提案として出され、あるいは新しく造語されるか、または古い語に新しい意味が与えられるのが普通である。たとえば *cybernetics* という造語については Norbert Wiener 自身がその経緯を語っている。<sup>12)</sup> また、いまは流行といってもよい「集合」は、英語では set、ドイツ語では Menge、またフランス語では ensemble であって、いずれもその国語では極めてありふれた日常語の1つにすぎない。これが数学的文脈で用いられた場合にはじめて G. Cantor 以来の「集合」の意味をもつわけである。

「学術用語集」は国語表記法の変革を契機とし、しかも共通基礎用語への配慮がなく多数の専門領域が同時に着手されるという、学術用語としては異常な条件下に作られたものである。従って、今日これを評する場合に、このような実施条件の制約を忘れてはならないであろう。

しかしながら、図書館学編については、学術用語集一般には見られない、特殊な成立条件があるはずである。たとえば、学術用語集・論理学編の専用部会主査（岩崎武雄）のことは<sup>13)</sup>によれば：

“伝統的論理学の場合には、用語が慣習的にはほぼ一定しているので、問題は比較的少なかったが、近代論理学の場合には、用語も人によってまちまちであり、また比較的新しく発展してきた分野であるため、選定の範囲をどの程度に止めるかということの決定も容易ではなかった。”

と述懐している。[なお、この論理学編には、図書館学編等でない「学術用語審査基準」(昭和35年12月6日；同39年6月24日改正)が初めて掲載されるようになった。]

これに対して、図書館学編では、同じく主査のことは冒頭を引用すれば (p. 9)：

“戦後わが国の図書館界は大きく発展しつつある。——中略——いっぽう図書館業務の遂行上および図書館職員の養成上から、従来まちまちであった図書館用語をすみやかに標準化・統一化することの必要性がますます強く要望されるにいたった。——下略——”

となっている。

上の2つの主査のことはを比較すると、論理学では伝統的な部門では問題が少く、主として近代論理学について選定の困難が述べられているのに対し、図書館学では伝統的に安定した部門がなく、全面的に不統一・不安定であり、用語集編さんの第一目的として標準化・統一化が強調されていると解される。

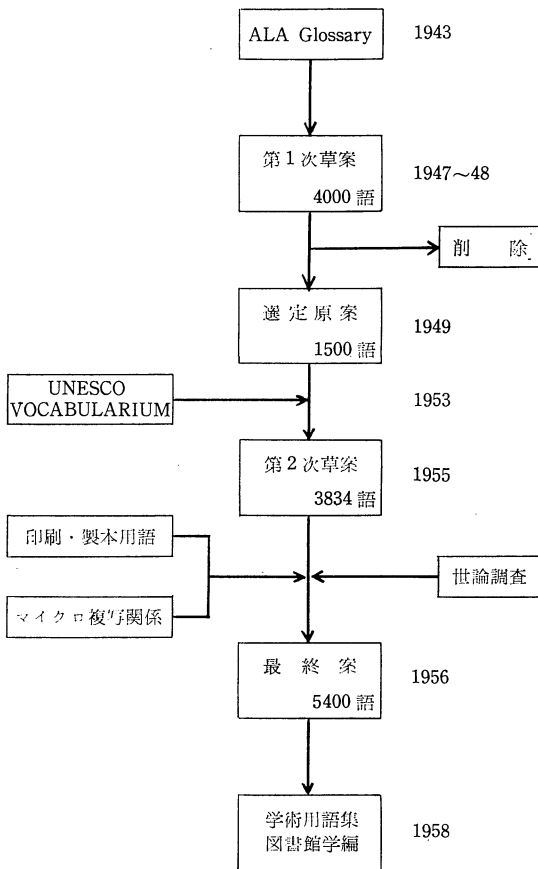
また、学術用語集・数学編の主査（弥永昌吉）のことは<sup>14)</sup>から、強いて推察すれば、数学では確率および統計に関する用語が第3部として別にされていることは、この部門が上記の近代論理学と同じような事情があったためと思われる。

なお、論理学、数学とも伝統的に確立された用語については、当用漢字表の制限にも拘らず、強い留保を示していること<sup>15)</sup>は興味あることであるとともに、このようなものをもたない図書館学の事情が逆に浮び上ってくるようである。

従って、図書館学編では、用語の選定方針が二転、三転している事情は主査のことはに詳しいが、これを図示すれば第1図のようになるであろう。

このように、この用語集は *A. L. A. Glossary* を底

「学術用語集・図書館学編」における分類学用語の考察



第1図 図書館学編の成立経緯

本とし、さらにユネスコの *Vocabulary* 初版を急いで追加した語彙をもち、各語の定義と解釈とはこの2本にゆだねたと推定することができる。

IV. 資料の解説

[資料 M]

文部省. 学術用語集 図書館学編 東京, 大日本図書, 1958. 16, 307 p.

本体は第1部和英の部, 第2部英和の部に分かれ, さらに第3部として, 主要略語表, 図書の形態と大きさ, 紙の仕上り寸法を付録している。

第1部は日本語ローマ字を見出しとし, 漢字かな形, および対応の英語を示す。第2部は英語を見出しとし, 漢字かな, 日本語ローマ字形がつづく。いずれもABC順排列である。この基本レイアウトはすべての「学術用語集」について共通である。

この編は, 第1部において, 対応の英語の出典を字体の差で表示し(例言1), 他の編にない特色をなしている。しかし, 今回の調査で若干のミスを見出したので, これに100%の信頼をおくことはやや危険であると思われる。

なお, 同じく第1部では, 対応の英語が複数併記されていることが少なくない。このうちには, 出典の1つである[A]では定義を付した語形と, 参照の語形とを明確にしているものがあるにも拘らず, 却って出典における統一をくずして, 同等に扱っているのは解釈に苦しむ。ただし, ユネスコ語彙は2版でこれを明示するようになったが, 初版では顕示されていないので, やむをえないことである。[例: “分類目録”]

[資料 A]

American Library Association. *A. L. A. Glossary of library terms*. Chicago, 1943. viii, 159 p.

序文によれば, この *Glossary* も 1926 年に発端を有し, 1927 年に *Standard Terminology in Education with Particular Reference to Librarianship* としてとうしゃ刷で出されたものがこれに当る。引きつづき委員会を設けてその拡充につとめ, 1935 年に一応の報告がされたという。これが不満足なものであったので, 編さんの体制をあらため, 1942 年に完成し, 翌年刊行されたものがこれである。

見出し語のABC順排列で, 各語に定義を付し, 他の語形からの参照も行きとどいている。

[資料 U]

Unesco. *Vocabulary bibliothecarii*.

Paris, 1953. 296 p.

— — Supplement. 1958.

— — 2nd ed. 1962. 627 p. [略称 U2]

いうまでもなく, [M]の底本とされたのはこの初版のみである。この語彙はユネスコの本質にのっとり, 初版では英独仏の3か国語, さらに2版ではこれにスペイン語とロシア語を加え, 国際性を維持している。全体はUDCで排列され, 索引は各国語別にできている。

UDCを排列に用いた目的は:

- i) 排列の国際性が維持される,
- ii) 分野間のバランスが明らかになる,
- iii) 定義を与えなくとも, 語の相対位置が明示される, という利点がある。もちろん, 今回のように分類学用語のみの抽出を行なう場合には, 大へん便利であることは

いうまでもない。分類の相互参照も十分に入っているのに、とくにこの感が深い。

本書もその起源は Henri Lemaître の *Vocabulaire Technique du Bibliothécaire* (未定稿 1939) にあるという。これをユネスコと FID の代表者が手を加えてユネスコから *Vocabularium* の予備版として出されている。Anthony Thompson は最初は草案の critic となり、次いで *Vocabularium* の編さん者を引受けている。もともと Lemaître は英独仏の 3 か国語で編さんしているが、これは A B C 順排列であり、分野間のバランスがわるく、かつ英語が不正確という結論となったという。

A. Thompson は U. D. C. 排列に直すとともに英語については M. L. Harrod の *The Librarian's Glossary*, London, 1938 (2nd ed. 1959) と A. L. A. *Glossary* を参考としている。また第 2 版 [U2] ではスペイン語とロシア語の部分については、原案をたずさえて、それぞれの代表者と対談して完全を期している。

#### [資料 V]

Vickery, B. C. *Faceted classification; a guide to construction and use of special schemes*. London, 1960. 70 p.

英国では Classification Research Group という文字通りの研究グループが、1952 年以来今日までレベルの高い分類法研究を集団として研究している。1950 年代にはかなりファセット分析による特殊分類法の作成、実用化が行なわれていることが 1 つの特色である。本書は Vickery の名を冠するが、むしろ CRG の経験と成果をガイドの形にうまくまとめたものといえることができる。従ってこれは講義のテキストとしても適当であり、1968 年度に使用したのである。

なお、この本はフランス語にも翻訳され<sup>10)</sup>、また Rutgers 大学の公開セミナーの 1 つとして、同じ著者の講義<sup>11)</sup> が別に出ている。

#### [資料 F]

Foskett, D. J. *Classification for a general index language; a review of recent research by the Classification Research Group*. London, Library Assoc., 1970. 48 p. (Library Association research publication. No. 2)

上の資料 [V] が 1950 年代の CRG の業績の 1 つをまとめたものとすれば、これは同じように 1960 年代の CRG の general classification への傾斜をまとめたものである。研究の詳細は別に C. R. G. の名でまとめて

いるが、<sup>12)</sup> これを Foskett に委嘱して簡潔な review としたのがこれである。

GRG はファセット分析を駆使して実用のファセット分類をいくつか作成したが、これを発展の 1 段階として、1963 年の会議<sup>13)</sup> を転機として一般分類法を、index language という基調の上に建設する方向を志向している。従って、本書は最近の分類学の用語の源泉として用いるわけである。

## V. 分類学用語の採取方法

資料 [M] は、先ず第 2 部英和の部の見出し語の全数検査を行ない、第 1 回は該当語にマークをつけ、第 2 回には見出し語 (英語) とその対応日本語を 1 件ずつカードに記入しつつ、第 1 回検査の補足を行なった。さらにこのカードを日本語ローマ字順に排列して、第 1 部和英の部と照合した。この時、英語の印刷字体の差から出典 ([A], [U], その他) の区別がわかるわけであるが、前述の如く 100% 信頼するわけにはいかなかった。従って [M]: [A] および [M]: [U] の対照は別々に、後述のように実施した。

なお、類縁の学術用語集として、論理学編および数学編も念のために検査したが、大勢には影響しないと判断された。

資料 [A] も、[M] とは独立に全数検査を 2 回行ない、2 回目に定義とともにカードに記入した。本書は定義なしに単に see reference としてある語が少なくなく、また定義を付した語には refer from が殆んど完備していることが特色であり、これを活用するため、see ref. もすべてカードに採録した。see also ref. は採らなかつた。

資料 [U] は UDC で分類排列されているので、025.4 の部門のすべての英語タームを、UDC 記号とともにカードに採った。同義語の順位は初版では明確でないが、第 2 版では、第 1 順位にある語は太字体にして区別があるので、念のために、初版から採取したカードにはアンダラインを追加して参考した。なお、2 版に初出の語は別ファイルとした。

資料 [V] は、全文を読みながら、必要と思われる語 (句) をカードに採録し、[A] における定義、[U] の UDC のような補完的記載の代りに、採録のページを記入し、必要の都度原文の文脈に立帰えることとした。以上の操作で 2 回以上採録した語も若干あったが、これはカードを合併して、再録ページを記入して、重要度判定の若干の資料とした。

さらにこの本の目次に使われている語をチェックし、また索引を全数検査して前記カードに注記した。text word と索引語とは若干の語形の差が認められた。

資料 [F] も [V] と同様な操作で抽出したが、これには索引がないので、索引からの検証はできなかった。

以上のようにして採用したカードは大体次のような量になった。

第 1 表

資料	総語数	採取語数	同・同義語整理後
[M]	5,400*	131	57
[A]	2,550**	40	40
[U]	2,500**	126	92
[V]	—	161	—
[F]	—	120	—

\* 「主査のことば」p. 7.

\*\* [U] の Introduction, p. 11.

## VI. 語彙の比較方法, 結果

5種の資料, 従ってこれから採取した分類学語彙のうち, 前3者, [M], [A], [U], は本来 vocabulary の型式をもっているもので, それぞれを直接比較することは不可能でなく, またその意義も明確である。これに対し, 後2者は text からの採取という判断を要し, 従って不確定度の高い操作に依存するため, 前3者, またはそのいずれかと直接比較することは妥当でない。

さらに, 前3者は, [M] および [U] の序文にあるように, 系譜関係をもっていて, 完全に独立とはいえない。他方, 後2者はいずれも [M] の刊行後の出版であり, 特に [F] は 1970 年のものであって, これを 1958 年の [M], あるいはそれ以前の [U], [A] と比較するには年代のズレがいかに大きすぎる。

前出の語数の比較から, 最も数の少いのは [A] からの採録分であることがわかる。同時にこの [A] は [M] および [U] の共通の前駆となっている。それ故, 次のような段階をとって比較を進めるのが最も実際的であると考えられる。

- i) [M] と [A] の比較 (とくに包含関係)
- ii) [M] と [U] の比較
- iii) [M], [A], [U] 共通部分の確認
- iv) [M] および [U] の特有部分
- v) 上記3者の構造的比較

vi) 以上の結果と [V] との比較

vii) [F] からの反省的考察

### A. [M], [A], [U] の数量的比較

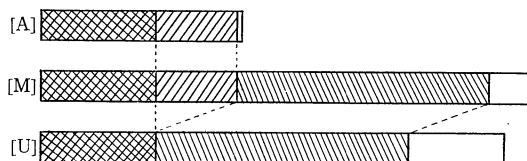
第 2 表

資料名	[M]	[A]
語数	97	40
相互に一致するもの	39	39
一致しないもの	58	1

このように [A] は殆ど完全に [M] に含まれるので, 次に [M], [A], [U] を同時に比較することとした。その結果は次のとおりであり, 図示すれば第2図のようになる。

第 3 表

資料名	[M]	[A]	[U]
総語数	97	40	92
3者一致のもの	23	23	23
[M] [A] 一致	16	16	—
[M] [U] 一致	50	—	50
互に不一致	8	1	19



第 2 図 語彙の数量的比較

### B. [M], [A], [U] の一致語の考察

この3者で一致した部分は, ある意味で最も consensus の高い語と考えられるが, これをまず次の2群に分けることができる。

#### 第1グループ

- broad classification
- class
- class mark (~ number; classification number)
- classification (classifying)
- classification code (code for classifiers)
- classification schedule (~ table)
- classification system (~ scheme; classifica-

tion)  
 classifier  
 close classification (minute ~; exact ~)  
 flexible notation  
 mixed notation  
 notation  
 pure notation  
 subdivision  
 subdivision of place (geographical ~; local list)  
 subdivision of time (~ of period; historical ~)

第2グループ

“categorical tables” (J. D. Brown’s “Subject Classification”)  
 Colon Classification  
 Dewey Decimal Classification  
 Expansive Classification  
 Library of Congress Classification  
 Subject Classification  
 Universal Decimal Classification

この第2グループが固有名詞に属することは自明であり、これ以上今回の考察の対象とする必要はない。[なお、[U2]では025.45としてUDCのみを挙げ、[U]の025.46の下にあるDDC、025.49に属する他のすべての分類法が省かれている。恐らく、UDCは唯一の国際的に理解され得る分類法であり、また他の多くの分類法は実用度が殆どないために、挙げる必要を認めなかったであろうと推察される。]

第1グループに属する16語は、class または classification を含む群、subdivision を含む群、および notation 群に、きれいに3分され、とくに第3の群の特異性は明瞭である。

Classification の語自体は[U]では次のように表わされている：

025.4 classification; classifying  
 classification (f); action de grouper par classes  
 Klassifikation (f); systematische Ordnung (f); Systematik (f)  
 classification system; classification scheme; classification  
 système (m) de classification; classifica-

tion (f); cadre (m) de classification  
 Klassifikationssystem (n); Ordnungsschema (n); Klassifizierungssystem (n)

同様に[A]の定義を引用すれば：

**Classification.** 1. A systematic scheme for the arrangement of books and other material according to subject or form. 2. The assigning of books to their proper places in a system of classification. [下略]

となっている。

[U]および[A]によれば、いずれも、単純な classification という語は、体系に関する場合と、操作に関する場合とがあり、文脈に応じて区別する必要があることが示されている。分類の操作について、たとえば J. Mills<sup>14)</sup>は Merrill に従い、practical classification と称し、次のように引用している：

Practical classification is “the art of assigning books to their proper places in a system of classification.” (Merrill, W. S. *Code for classifiers*; 2nd ed. Chicago, 1939, p. 1)

[これによると[A]の定義(2)はMerrillそのままであることがわかる]

一方、[M]では：

classification	{	分類	classification
		分類体系	classification system:
classifying	{	分類作業	classification scheme;
		分類	classification
		分類作業	classification
		分類体系	classification system:

とあり、“分類”という日本語と、classification との微妙なニュアンスの差が感じられる。

broad (または close) classification についても、同様な吟味を行なうと、この場合にも[A]では classification (1), (2) の両方の意味がある。即ち、分類体系の詳しさと、分類作業の詳しさとが明らかである。

しかるに、[U]ではこの語は025.41:168.2に分類され、他の語とともに分類体系の構造に属すると判断される。[M]ではもちろん“分類”の解釈の幅によって、体系を主として解釈するか、意識的に操作の精粗まで含めるか、決めがたい。

第4表

No.	UDC	代表 term	[U=M]	[M=A]	[U=M=A]
i	025.4	classification	7	5	4
ii	025.4 : 026	special classif.	1	0	0
iii	025.41: 003	notation	4	4	4
iv	025.41: 168.1	denotation	4	0	0
v	025.4 : 168.1P	Tree of Porphyry	7	0	0
vi	025.41: 168.2	hierarchy	17	5	4
vii	025.42	classif. schedule	2	2	1
viii	025.42 ( )	common subdiv.	7	5	3
ix	025.421	class mark	2	3	1
x	025.45	decimal classif.	7	1	1
xi	025.46	Dewey Decimal C.	1	1	1
xii	025.49	L. C. Classif.	8	5	4
計			67	31	23

仮りにこれを操作に属する語とすると、次の小グループが成り立つ：

- broad classification
- close classification
- classification code
- classifier

残る subdivision 小群は、分類体系の構造に属するものとして、後で取扱うこととする。

C. [M] ⊃ [A] と [U] との比較

第2図の如く、[A] はただ1語を除いて [M] につまれている。数量的に言えば、[M] の分類用語は [A] から約 40%、[U] から約 50% を継承し、かつ [U]、[A] 共通部分を除けば、[U] は [A] の3倍程ユニークに功献していることがわかる。[A] 特有の寄与はわずか16語にすぎないわけである。

このことはわが国が一般的にアメリカの図書館学に負うところが大きく、しかも [M] 成立の第一与件になっているにも拘らず、こと分類学用語に関する限り、ユネスコに代表されるヨーロッパ側の寄与ははるかに大きいことが推定される。

3者共通部分を除いた語彙について、便宜上 [U] にならって UDC によって分類して、全体のスペクトルの見当をつけてみたい。

第4表をそれぞれ横に眺めてみると、まず No. iv~vi のグループでは、[U] からの寄与が著しく大きく、ことに iv~v では [A] からの寄与がゼロであることに気

付くであろう。これが分類学用語に関して最大の問題点となるところである。

[No. x, xi, xii は十進分類法(とくに UDC) および他の一般分類法のみに関するものであるから、以下の考察からは除くことにする]

VII. [V] との比較

次に以上の結果を [V] と比較することになるが、[V] は textbook からの任意採取で、語数も著しく多い。これを前3者のように何段にも整理された語彙と直接比較することは困難である。

[V] 語彙は先ず次の5グループに分けた：

基礎	31	(第4表 No. i, ii, iv, v 相当)
構造	43	(同 No. vi, vii, viii 相当)
ファセット	24	([U2] によれば 025.41: 168.1)
記号法	44	(第4表 No. iii 相当)
目録編成法	19	
計	161	

これはファセット分析法の本であるから、ファセットに関する用語が多いのは当然であり、また十進記号法から自由になったため、記号法の用語が最も多いことが概観される。

A. 基礎用語

最も基本的な概念と思われる次の2語(句)の5資料における分布を見ると：



subject M U V  
subject cataloging A F M V

[A] は subject を持たない代りに, subject cataloging において広い定義を与えている:

“**Subject Cataloging.** The phase of the process of cataloging which concerns itself with the subject matter of books, hence, includes classification and the determination of subject heading.”

[F], [V] も同様な用い方である。これに対し, [U] は 025.343 subject catalogue と 025.4 classification とを分けたために, 両者を包む上位概念を落とす結果になった。

なお, 最近の用語としては, たとえば [F] や [V] のように subject analysis が有力であるようだが, これに analysis の結果の表現まで含めてよいかどうか, 多少の疑問が残る。

第4表 No. ii の special classification に誘発される概念は general classification であるが, これは [A], [M], [U] には遂に見出せなかった。これは [F] および [V] にもみ現われ, CRG が鋭意追求しているところのものでもある。

分類法の構成原理ともいうべき概念を, enumerative と analytico-synthetic の対立であるとする, ([V] p. 8), このいずれもやはり [F] と [V] をまたなければならぬ。もちろんこれは S. R. Ranganathan の提唱によるものであり, その Colon Classification の初版は 1933年に遡り, [A] にも採用されている。しかしながら, Ranganathan は edition ごとに大きな回心を見せるので, この考えが西欧側 (とくに英国) で受入れられたのはいつであるか, かなり厳密な研究を要すると思われる。仮りにこれを 1957年の Dorking 会議<sup>15)</sup> の頃と推定しても, これが [U] に反映することは望みがたく, [U2] で facet および facet classification が採用されたのが, せめてものことであると理解されるのである。(なお, 1935年に刊行された H. E. Bliss の Bibliographic Classification は [A] では認めておらず,<sup>16)</sup> [U] で初めて採用されているような状況である。)

次に大きい問題は, pre-coordination, post-coordination であろうか。これは 1970年の [F] に初めて見出されるのみであるので, これ以上は検討しない。(post-coordination に関連して, search に関する語群が想記されるが, 狭義の “分類” から少しはずれる点もあるの

で, 今回は見送った。)

[U] の基礎用語の特徴をなす論理学用語 (UDC 025.41:168.1) は, [A] に全く含まれず, 従って [M] が採用した語はすべて [U] に由来することは自明である。これらの語は, あれば便利, 必要ならば用いるということになろうか。たとえば, search に関する場面などでは, このように基礎的な概念よりも, むしろ分類表 (広く言えば索引言語) の構造の概念が直接必要を感じさせるのではあるまいか。

[V] は relation に関する語が下記のように著しく多い。

relation  
bias relation  
class relation  
comparison  
effect relation  
generic relation  
influencing relation  
relational operator (記号法)  
relational term

もちろん [A] にも [M] にもない。[U] はこれを UDC の補助標数の記号の説明という形で扱ったために [colon]=relation のみをあげているが, [M] では扱いに困って捨てている。

relation についてすぐ思い出されるのは J. M. Perreault の “Categories and relators” という提案である<sup>17)</sup> が, これは後に FID から PE-Note 958 (Feb. 1969) として出されていて, 必読の文献と思う。

#### B. 分類法の構造に関する用語

分類に弱い [A] ではタテの系列, class, division, section と subdivision しか載せていない。[U] では 025.41:168.2 の下に各種の語が混入している感じを受ける。

これに属する最も広い, かつ新しい語は structure [V] あるいは structured indexing language (または vocabulary) [F] であろうか。古くから用いられる hierarchy は [A] 以外はみな用いている。

タテの系列を漠然という場合は chain [V] または hierarchical chain [F] が便利であるが, [A], [M], [V] にはない。同様に, 同一の親 parent class から, 同一の区分原理によって生まれた subclass を array という (以上 [V], [F])。 (このような単純な語がないために, 講義でつまらぬ苦勞をし, この分類学用語論のきっかけ

になったことが思い出される。)

タテの関係語では subordination [M], [U], [V], 軽くいえば subclass [F], [V] であろうか。反対の方向を意味する語は upper link [V] であろうか。ヨコの関係を示す coordinate は [U] では UDC の (+) 記号の意味であるから, array とは概念が異なり, [F] の用法が正しい。なお, [U2], [F] では coordinate indexing が導入されているが, この場合も, array とは異なることは明らかである。

compound/complex はなかなか難しい問題を蔵している。たとえば [M] では ([U] に由来する)

compound number 複合標数; 複合番号  
compound subject-name 複合件名標目

がある。この範囲では, 型式上2つの数字列または2語以上の複合と解することができる。しかしながら, [V] のように

complex subject  
compound subject  
compound subject heading  
compounding (of attributes)

同様に, [F] でも

complex subject  
compound subject

がある。これらは, 主題が複雑(複合的)である場合を示している場合が多く, [M] の訳語のような, ある分類表または言語においてたまたま2語で表現せざるを得ない場合とははっきり異なるものと思われる。

#### C. 記号法に関する用語

これは, [A], [M], [U] が完全に一致した唯一のグループであったが, ファセット分類法の [V] に至って, しばしの平和は破れたのである。

即ち, ファセット分類法では, 各ファセットを異なる記号で表わし, これを組合せてもそれぞれのもとの意味を明示するために, compound structure (同書 p. 48) が必要となるためということができよう。

まず notation の機能は filing order (p. 48) を明示することであり, 構造を顕示した hierarchical なものにするか, あるいは単純に ordinal なもの (p. 44) にすることができる。構造表現の程度に応じて functional parts (p. 50) を組合わせ, これに distinct species of character (p. 53) をわりあてる。平均記号長さは notational base (用いる記号の全部, キャラクターセット) の大きさと反比例の関係をもつ。

species of character は, numerals, letters, および punctuation marks 等の符号に分かれる。いずれにせよ, 出来上った分類記号は全体として hospitable (p. 48) である必要があり, その上 ease of recognition and retention (p. 58) が保証されることが望ましいという。

このような記号法に関する探求は [V] のみに見られる特色であり, 今日になってみればファセット分類によるマニュアル・サーチ・カード・ファイルの全盛期を示す1つのモニュメントと見ることもできよう。

#### D. 目録編成法に関する用語

UDC では分類目録の編成は目録の種類として 025.343.2 に位置づけられている。従って, 025.4 の部分から採取した [U2] では次の語が落ちていることになる:

025.343 subject catalogue  
.1 alphabetical subject catalogue  
.2 classified catalogue; classed c.;  
systematic c.  
in subject order; in classified o.  
double entry  
multiple entry

[M] の I の項に, in subject order という奇妙な形があり, これに "分類順にした" という訳語を附しているのは, 正にこれに由来することがわかった。double entry は [U] では duplicate entry として 025.4 (十進分類法) の項に取めているが, もちろん十進分類法(とくに UDC) に固有の操作ではない。

分類目録編成法で最も不安定な認識の下にあると思われるものは alphabetical index ([V] p. 63) である。これを BS 1000 C<sup>(8)</sup> では alphabetical subject index として特に一章あて, 簡にして要をつくした説明がある (p. 33-41)。その作成手段として chain indexing あるいは rotated entry (いずれも [V], p. 64) がある。

ここで, 分類表の記号部分でなく, 言語による説明句にも名前をつけ, これと alphabetical index (これにも正しい名前が必要) の verbal heading (p. 65) との語形対応関係を論じることになる。

[M] が alphabetical subject index に対し ABC 順件名索引という訳語を与えているのは, [A] の定義の一部をとったもので, 誤解を招きやすい。即ち:

**Alphabetic Subject Index.** An index under specific subjects arranged alphabetically, as an independent periodical index, an index to an

author or a classed list of books or articles, an index to a classed catalog.

[F] では、その標題のとおり、index language としての一般理論を目的とするため、カード目録の編成法には、殆どふれていない。ただし、今までに出なかった aspect card または term card 方式 (p. 17) をとりあげ、さらに coordinate indexing に言及している。

coordinate indexing と chain indexing とは [M] ではなく [U2] ではじめて 025.343.1 (alphabetical subject catalogue) の項に入られている。

#### E. ファセットおよびカテゴリーに関する用語

最後に [V] および [F] に特有のファセット・カテゴリーに関する用語を検討する。

さきに分類学の基礎用語にグルーピングした用語のうちには論理学用語を援用したものが少くないことを指摘した。しかし、Vickery および Foskett に代表される CRG の基調はファセットの分析道具として category ([V] p. 12-13) にあると考えられる。[V] ではそのために 1 章を fundamental categories にあて (p. 23-26) ている。さらに Ranganathan が公準とした personality, matter, energy, space, および time の 5 つ (p. 23) よりも便利なものとして多数のカテゴリーが挙げられている。

substance (**product**)  
organ  
**constituent**  
structure  
shape  
**property**  
object of action (patient, raw material)  
action  
operation  
process  
**agent**  
**space**  
**time**  
general property  
general operation  
**logical operation**

[太字は [V] の索引に採られた語を示す]

[F] はこの方向をさらに追求する CRG の活動を要約紹介するものである。たとえば、entity の区分とレベル付け、あるいは attribute terms の順位付け、ope-

lator (p. 40) の序列など、すべてカテゴリーおよび relation をある程度一般化することに成功しているようであるが、完成されたものではなく、むしろテスト以前の段階にあると解釈される。従って語彙として安定したものを求めるには尚早の感をうける。

なお、B. C. Vickery の *On Retrieval System Theory*. 2nd ed. の第 10 章<sup>19)</sup> Terminology では、隣接領域 (数学、電子計算機学、言語学等) からの用語の侵入が指摘されている。これは今日あるいは今日以降における用語整理の 1 つの方向を示しているということもできよう。

### VIII. ま と め

- i) 文部省「学術用語集・図書館学編」(1958) の分類学関係の用語を採取し、A. L. A. *Glossary* (1943) および Unesco: *Vocabulary* (1953) のそれと比較した。
- ii) 「学術用語集」は戦後の国語表記の広汎な改革を契機として、旧来の用語の表記変換、その解決の 1 つとしての言い換え、と併せて、用語の統一を目標とするものである。
- iii) 図書館学編は典拠とすべき用語集がないため、最初 A. L. A. *Glossary* を、次いで Unesco: *Vocabulary* を英語用語の選定の基盤として用いている。なお、後者もまた前者を参考文献としてあげている。
- iv) 参考のため、上記 3 語彙のほか、B. C. Vickery の *Faceted Classification* (1960) および D. J. Foskett の *Classification for General Indexing I language* (1970) をも用いた。前者にとくにファセット方式による特殊分類法を志向するものであり、後者は索引言語としてし一般分類法を追求しつつあるもので、前者に比して特有性が強いものであった。
- v) 「学術用語集・図書館学編」分類学用語のうち約 40% は直接 A. L. A. に由来すると認められる。Unesco からは、A. L. A. と同一のもの約 20%、特有のもの約 50% の寄与があったと判断され、結局数量的には後者が支配的である。日本語の統一についてはこの学術用語集には一応の努力のあとが認められた。
- vi) A. L. A. *Glossary* は語数は著しく少いが、その定義は正確であり、今日でも変更の要を認めないものが少なかった。

- vii) Unesco: *Vocabularium* は、用語の分布からいえば A. L. A. よりも分類学基礎、概造などの分野で強かった。しかし、Vickery との比較では、なお一般分類学の取扱いに不足な点があり、あるいは UDC への密着が災いしたのではあるまいか。
- viii) Vickery の *Faceted Classification* は年代的に前 3 者より後であるから、学術用語集の語彙選定に関して、これを直接適用できない。従って単なる参考として用いたが、分類法の構造、記号法およびカテゴリーの点では極めて豊富な示唆を与えることがわかった。
- ix) Foskett も単なる参照にすぎないが、特にカテゴリーの追求にその主たる特色があると判断される。
- x) Vickery の *On Retrieval System Theory* によれば、今後の分類学用語には、数学、電算機技術、言語学等からの用語の流入は避けられないであろう。
- 1) 昭和 21 年 11 月 16 日付内閣訓令第 7 号「当用漢字表の実施に関する件」；同日付内閣告示第 32 号（当用漢字表）；たとえば、文部省。現行国語表記の基準；付参考資料。1967. p. 1-92.
  - 2) 昭和 21 年 11 月 16 日付内閣訓令第 8 号「現代かなづかい」の実施に関する件；同日付内閣告示第 33 号（現代かなづかい）；たとえば上掲書，p. 97-114.
  - 3) 文部省国語調査室。外国の地名・人名の書き方（案）。昭和 21 年 3 月。たとえば上掲書，p. 264-277.
  - 4) 昭和 29 年 12 月 9 日付内閣訓令第 1 号「ローマ字のつづり方の実施について」；同日付内閣告示第 1 号（ローマ字のつづり方）；たとえば，上掲書，p. 227-229.
  - 5) その後制定せられた；昭和 35 年 7 月 11 日付内閣訓令第 1 号「送りがなのつけ方」の実施について；同日付内閣告示第 1 号（送りがなのつけ方）；たとえば上掲書，p. 115-121.
  - 6) Wiener, Norbert. サイバネティックス 第 2 版 池原止戈夫他訳。東京，岩波，1962. p. 14-15.
  - 7) 文部省。学術用語集 論理学編。東京，大日本図書，1965. p. 10.
  - 8) 文部省。学術用語集 数学編。東京，大日本図書，1954. p. 13.
  - 9) それぞれの「例言」の末尾参照。
  - 10) Vickery, B. C. *La classification à facettes; guide pour la construction et l'utilisation de schémas spéciaux*, traduit de l'anglais par Paul Salvan. Paris, Gauthier-Villars, 1963. 60 p. (Documentation et information)
  - 11) Vickery, B. C. *Faceted classification schemes*. New Brunswick, N. J., Rutgers Univ., 1966. 108 p. (Rutgers series on systems for the intellectual organization of information. Vol. V)
  - 12) Classification Research Group. *Classification and information control; papers representing the work of the C. R. G. during 1960-1968*. London, Library Association, 1969. 130 p. (L. A. research publications. No. 1)
  - 13) Library Association. *Some problems of general classification scheme; report of a conference held in London, June, 1963*. London, 1964. 47 p. (なお，文献12に再録されている)
  - 14) Mills, J. *A modern outline of library classification*. London, Chapman and Hall, 1960. p. 158.
  - 15) *Proceedings of the International Study Conference for Information Retrieval, Dorking, May, 1957*. London, Aslib, 1957. 151 p.
  - 16) Mills, J., *op. cit.*, p. 133.
  - 17) Perreault, Jean M. *Rev. internat. docum.*, vol. 32, 1965, p. 136-144; のちに同著者の *Toward a theory of UDC*. London, Clive Bingley, 1969. p. 119-140 に収められている。(関連論文は同じく p. 141-148)
  - 18) British Standards Institution. *Guide to the Universal Decimal Classification (UDC)*. B. S. 1000.C: 1963. London, 1963. 128 p.
  - 19) Vickery, B. C. *On retrieval system theory*. 2nd ed. London, Butterworths, 1965. p. 179-183.